

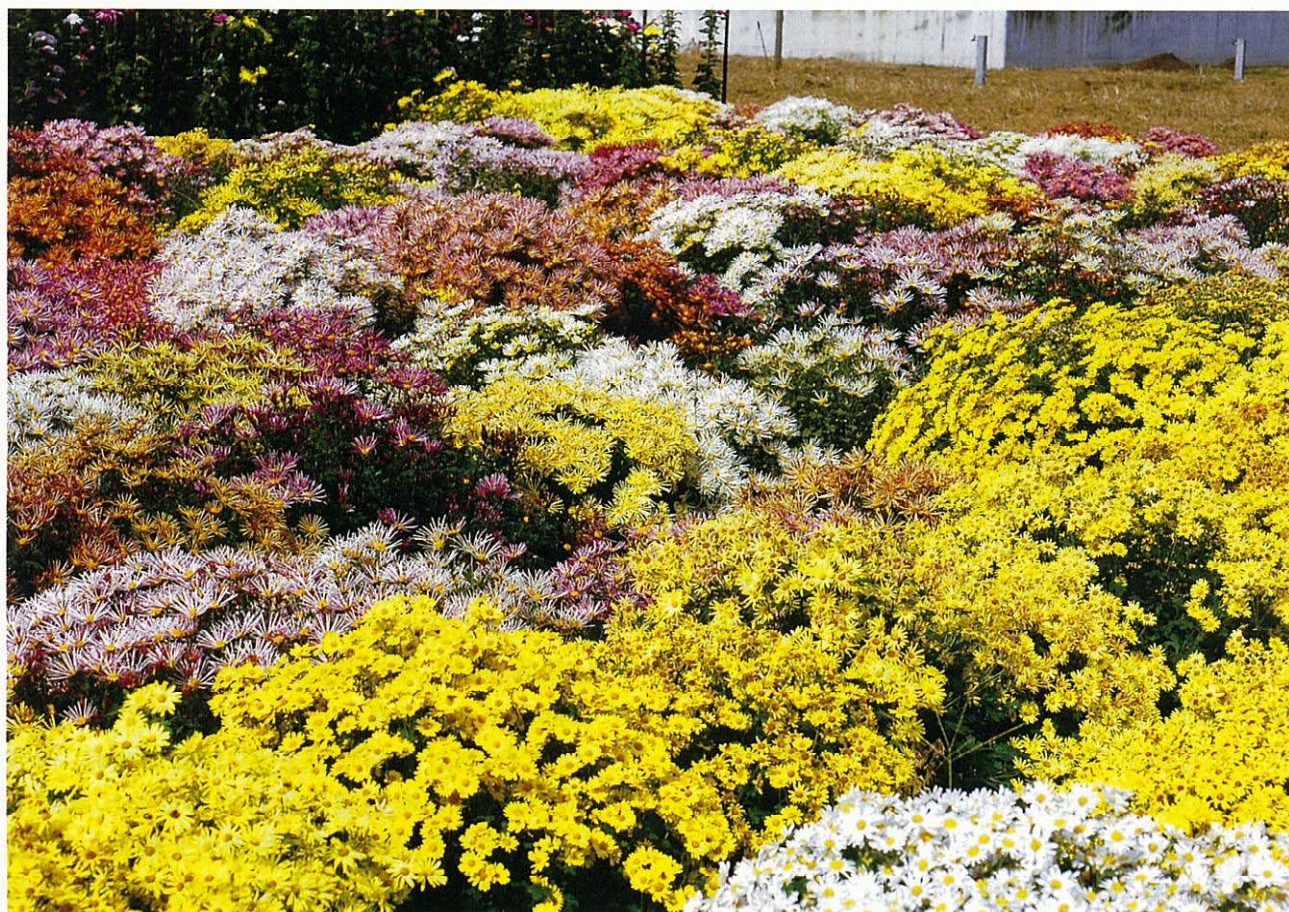
「食と農」の博物館 展示案内

No.43
東京農業大学「食と農」の博物館
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28
TEL.03-5477-4033 FAX.03-3439-6528

開館時間 午前10時～午後5時(4月～11月)
休館日 午前10時～午後4時30分(12月～3月)
月曜日(月曜が祝日の場合は火曜)・毎月最終火曜日
大学が定めた日(臨時休業がありますのでご注意ください)

展示期間
2009.10.17～2010.3.21

菊畑へようこそ ～キクが語るハーブの世界～



菊畑へようこそ

はじめに

顕花植物の中でキク科植物はもっとも大きなグループのひとつで、かつ、双子葉植物の中では最も進化した植物といわれています。キク科にはおよそ20,000種あります。一般的に「き

く」という言葉からイメージするのは、秋たけなわの頃各地で催される菊花展に展示されているあの太輪で黄色の菊であったり、小ギクの衣裳を纏った菊人形かもしれません。東北をふるさとに持つ人であればしゃきしゃきした歯



Chrysanthemum zawaadski

触りの食用菊かもしれません。また、菊の花は日本国皇室の御紋にもなっていることは日本人であればどなたもご存じのはずです。アメリカ人ルース・ベネディクトは日本の文化を紹介した本に「菊と刀」というタイトルを付けています。このように、キクは日本を代表する花であり、日本を象徴する花といっても過言ではないと思います。

そのような「きく」に今回はスポットを当て、キク連植物の多様性、観賞菊、食用ギク、ハーブきくを紹介します。この展示をとおして、見過ごしていた、あるいは、知られざる「きく」の一面を再発見していただければ幸いです。

1. キクの仲間(広義キク属の多様性)

広義キク属(キク連。連とは植物の分類単位の一つ)植物は花器構造や種子などに多様性が見られ、これらの形質(特徴)によって分類されています。BremerとHumpheries(1993)はこのグループを1,741種に分類しています。種数を見れば、このグループがどれだけ繁栄し、様々な特徴を持っているかおわかりいただけるとと思います。これらの植物は北半球を中心に分布しています。特にユーラシア大陸、それもアジア地域には多くの種が分布しています。暑いのは苦手ですが寒さにはめっぽう強く、熱帯地域ではやや標高の高い涼しい環境や乾燥ぎみの環境に生育していますし、暖温帯、亜寒帯、寒帯では至る所に分布しています。キク連植物の分布域は意外に人の生活圏の近くにあり、いやがおうにも目につく存在です。そのようなことから、古来より人はキク連植物と関わり合っ



コハマギク *Chrysanthemum yezoense*

て生活してきたものと考えられます。東洋では野生ギクと人との関わりから観賞菊が生まれ、一方、西洋ではキク連植物と人との関わりからハーブが生じたと考えられます。

2. 観賞用キク

観賞菊の元祖は中国の唐の時代につくられ、日本には西暦380年頃、仁徳天皇の時代に百済を経由して伝わったといわれています。その頃から中国・韓国・日本の皇帝や貴族の人々など身分の高い人にだけ観賞される高貴な植物として扱われてきたようです。時代が変わって、現在私たちは身分や生い立ちとは関係なく菊を観賞することができますし、その昔人々が目にしなかったであろう菊も観賞することができます。そのような意味では大変幸せな時代に生きているともいえます。観賞菊は花の大きさを基準に大きく三グループ、すなわち大ギク、中ギクおよび小ギクに分けられます。大ギクには厚物、管物、厚走り、一文字菊、美濃ギクおよび掴みギクがあり、1、3、5および7本仕立てに、さらには「千輪仕立て」で仕立てられ、花壇と呼ばれる菊を観賞する目的のために設置された小屋で赤、黄、白の三色の菊を観賞します。また、一般家庭では、近年スペースの問題などもあり、「だるま作り」や「福助作り」などでこれらの菊を楽しむ園芸家もおられます。

中ギクには、江戸菊、嵯峨ギク、伊勢菊、肥後菊、丁子ギクなどがあります。これらの菊は、「篠立作り」や「箒仕立て」といった仕立て方で栽培され、観賞されます。

小ギクには、文人菊、貝咲き菊、魚子菊、薊咲



大輪ギク白

き菊、毛差菊、かがり弁菊およびみどり菊などがあります。これらの菊は「懸崖作り」や「盆栽仕立て」などに用いられ、観賞されます。これらの内、文人菊や貝咲き菊は目にする機会がありますが、それ以外の小ギクはほとんど目にする機会がない珍しいキクです。

以上、上記のキクを和菊とすれば当然「洋菊」と呼ばれるグループもあります。これらはスプレーギク、クッションマム、ポンポン咲き、ガーデンマムなどと呼ばれ、切り花や鉢植えとして栽培されています。

3. 食用ギク

皆さんは菊の花を食べたことがありますか。東北地方を旅したホテルや旅館で、地料理の彩りにキクの花びらをご覧になったことはありませんか。中部地方以西ではキクを食べる話を耳にしません。東北地方や北関東、新潟県などではキクの花びらを食べる習慣があります。これらは食用菊として栽培され、その生産量は山形県がトップです。主な品種に黄色の「阿房宮」、「岩風」、「寿」、「越天楽」、赤紫色の「もってのほか」などがあります。山形県の人たちは季節になると、これら食用菊の花びらを収穫し、さっと湯がき、酢の物で食べます。その食べる量も半端ではなく、各家庭でどんぶり一杯のキクの酢の物が食卓に供されるようです。それをほおぼり、シャキシャキとした花びらの食感を楽しむとともに、口中に広がるかすかなキクの香りとほろ苦さを味わい、秋を感じるのかもしれない。



食用菊 'もってのほか'

4. ハーブきく

キク科植物はシソ科、セリ科植物とともにたくさんのハーブを含むグループです。そんな中から今回の展示では、観賞菊や食用菊の仲間であるキク連(Anthemideae)に含まれるハーブを紹介します。キク連のハーブには分類学的にノコギリソウ属(*Achillea*属)、ヨモギ属(*Artemisia*属)、キク属(*Chrysanthemum*属)、シカギク属(*Matricaria*属)、*Santorina*属およびエゾヨモギギク属(*Tanacetum*)などのハーブがあります。

ノコギリソウ属のハーブ、セイヨウノコギリソウ(*Achillea millefolium*)は民間薬、美容などに利用されています。

ヨモギ属のハーブとしてはサザンウッド(*A. abrotanum*)、ワームウッド(*A. absinthium*)、マグワート(*A. vulgare*)が有名で、特有の香りを利用して防虫剤や民間薬として使われています。回虫、ぎょう虫などのむし下し、抗ガン剤、抗マラリア剤などの薬も発見利用されています。これらの中でワームウッドはアブサン酒の香り付けにも用いられています。これら以外のヨモギ属のハーブは葉色が銀色で大型になることからよく花壇用に植栽されます。日本にも



ハーブキク *Achillea millefolium*

ヨモギ属の植物としてヨモギ (*A. princeps*) やアサギリソウ (*A. schmidtina*) があります。ヨモギは草餅に使われたり、もぐさとして利用されます。蚊やブユに刺されたときにはヨモギの葉を揉んでその汁を付けるとかゆみが収まります。沖縄ではヤギ肉と一緒にヨモギの葉を煮たフーチバージュシーという料理があります。アサギリソウは葉が銀色で美しく小型のため鉢植えに利用されています。もう一つヨモギ属のハーブとして忘れてはならないものがあります。それはタラゴン (*A. dracunculus*) です。タラゴンにはフレンチタラゴンとロシアタラゴンがありますが、香りの高さからフレンチタラゴンが好まれ、フィヌ・ゼルブ、ピクルス、ソース、ピネガーなどに用いられます。

キク属のハーブにはフィーバーフュー (*C. parthenium*) やオックスアイデージー (*C. leucanthemum*) があります。前者は欧州では昔から頭痛を治すハーブとして有名です。後者はお茶として利用されています。日本にはリュウノウギク (*C. makinoi*) があり、浴湯剤として利用されます。

シカギク属のハーブには、ジャーマンカモミール (*M. chamomilla*) とローマンカモミール (*M. nobilis*) がありどちらも白い花を咲かせ、植物体全体にリンゴの香りがあります。お茶や浴湯剤として利用され、安眠効果や美容効果があります。黄色花のダイヤーズカモミール (*M. tinctoria*) は、その色を利用して染色に使われます。

Santorina 属のハーブでは植物体全体が銀灰緑色のサントリーナ (*S. chamaecyparissus*)



ハーブキク *Matricaria chamomilla*

が有名です。この種類以外にも多くの種類がありますが、種類が区別されることなく、すべてサントリーナと呼ばれています。植物体が美しいことと強い芳香を持つことから花壇へ植栽されたり、虫下し、害虫忌避剤として利用されています。

エゾヨモギギク属のハーブにはコストマリー (*T. balbarnita*) とタンジー (*T. vulgaris*) が知られています。コストマリーは英国ではその昔ビールの香り付けに利用されていました。現在はサラダ、ポタージュに少量だけ使われたり、お茶に利用されています。一方、タンジーには殺虫・消毒作用がありノミやハエがこの香りを嫌うので戸口につり下げて使われます。

5. キクの品種改良について

世界の三大打り花とはバラ、キク、カーネーションをいいます。このなかでキクの生産量はバラやカーネーションを抑え、堂々トップです。このようなことを聞くと皆さんは不思議に思われるかもしれません。日本ではキクの切り花といえば、仏壇に供える花、葬儀に使用する花と昔から相場が決まっていますので、そんなキクがどうしてトップなのかと、疑問に思いませんか。近年におけるキク切り花の品種改良には目を見張るものがあります。当然昔から栽培されてきている小・中輪系の白・黄色花も販売されていますが、花屋さんで売られている菊の花は洋風化が進み、花色・花形・咲き方など実に多様です。花色についてみると、従来のキクは色が限定され、黄色、白、暗赤色、紫桃色といった日本的な色以外は無いと言って



C. morii X 栽培品種 中部電力(株)との共同研究

も良いくらいでした。しかし現在、上記の花色はもちろんのこと、これらに緑色、パステルカラー、中間色、複色花などが加わり、色彩の幅が広がり豊かになりました。花形についても、舌状花が大きくなったものや、舌状花の枚数が増加したものなどがあり、豪華さが強調されるようになりました。また、花の咲き方も「スプレー咲き」といって枝先が広がり、その先に花が咲くことで、従来のキクに比べ一本の切り花でボリューム感のある咲き方をするキクが出てきました。これらの特徴が組み合わさり現在の切り花キクは以前とは比べものにならないくらい華やかでバリエーションに富むようになりました。このようなキクの切り花であれば、現代生活にふさわしく贈答花としても喜ばれますし、リビングルームに飾っても違和感が全然ありません。ぜひ、展示の帰りに花屋さん立ち寄りしてみてください。

一方、野生種ギクに目を転じてみますと、そこには、われわれの想像を超えるキクが存在しています。莖や葉に芳香を有するもの、葉が緑色ではなく銀灰緑色のもの、舌状花が無くて管状花だけの丸坊主のような花など、枚挙にいとまがありません。現在このような野生ギクの形



C. vestitum X 栽培品種 中部電力(株)との共同研究



花の咲かない菊

質を従来の観賞菊に導入するための品種改良が行われ始めました。もしかすると、数年後には今まで利用されていなかった野生ギクの形質をもったキクが花屋さんの店頭を飾るかもしれません。乞う、ご期待。

6. 今後の問題

私たちは生活に潤いを与えてくれるキクを見たり、食べたり、香りを楽しんだりしていますが、問題はないのでしょうか。観賞菊を栽培されている現場の人々、食用菊の栽培に関わる方々に接し、話を聞く機会がありました。そのような話の中で、一つだけ紹介します。観賞菊について、最近の品種はウイルス病に感染し4~5数年で生育が悪くなり、秋の菊花展に利用できなくなってしまう、という話がありました。これは栽培する人にとってはかなり労力がかかる大きな問題です。普通、菊は5月頃挿し芽を行い、これを大切に育てて秋に花を咲かせます。ところが、新品種のキクはウイルスに感染

し栽培できる期間が短いため、毎年交配を繰り返して種子を取り、良い形質を持った個体を選抜し、それを展示会に使っているとのことでした。この問題を解決するには難しい問題がたくさん含まれ一朝一夕には解決できません。しかし、最近のバイオテクノロジーを使えばできないことはありません。バイオテクノロジーを利用すると、花粉の飛散が問題になります。この問題を解決するには花粉ができないような菊の品種を作り出さなければなりません。これはなかなか大変なことです。しかし、最近、花粉が

できない菊を開発したとの話を聞きました。これは朗報です。このような技術とバイオテクノロジーの技術を巧く利用すれば、ウイルス病に強く長期間にわたって栽培できる観賞菊が作れる可能性が考えられます。

このように、キクにまつわる問題は観賞菊だけにとどまらず、食用菊についてもたくさんあります。キクに関する問題について興味を持たれたならば、我々と一緒にキクについて、考えたり、研究したりしてみませんか。

菊畑へようこそ

～キクが語るハーブの世界～

関連イベント

■講演会(無料・参加自由 直接会場にお越し下さい)

(会場：「食と農」の博物館 1F 映像コーナー)

① 10月24日(土) 13:00～14:00

「ハーブに合ったキクをつくってみませんか」

「どうしてキク関連108属1741種はどんな組合せでも雑種ができてしまうのでしょうか？」

講師 近藤 勝彦氏 (東京農業大学農学部農学科教授)

② 10月31日(土) 13:00～14:00

「自然を守るキクの開発」

講師 篠山 治恵氏 (福井県農業試験場育種部主任研究員)

③ 11月8日(日) 13:00～14:00

「あまいかおりのキクを飾ろう」

講師 津田その子氏 (中部電力株式会社技術開発本部研究員)

④ 11月14日(土) 13:00～14:00

「新宿御苑における菊の伝統的栽培」

講師 杉本 秀健氏 (東京農業大学教育後援会事務局長)

⑤ 12月12日(土) 13:00～14:00

「キクのハーブを楽しむ」

講師 本橋 強氏 (東京農業大学農学部農学科准教授)

⑥ 12月19日(土) 13:00～14:00

「菊の食文化」

講師 小笠原宣好氏 (山形大学農学部生物生産学科教授)

■企画・制作 東京農業大学農学部農学科遺伝育種学研究室